Om Hrim ritam ①

オーム　フリーム リターム　 トヮマーチャロ　 グナジーッ　グネーディャーァー

Om Hrim ritam tvam-achalo gunajit gunedyah

オーム 根本エネルギー　永遠の真理　あなたは　 不動の　 すべての　 グナはあなたを尊敬する

ナークターム　 ディヴァム　 サカルナム　 タヴァ　 パーダ パッドマム

Naktam divam sakarunam tava pada padmam;

夜　　　　　　昼　　　　　　尊敬するもの　　 あなたの　 御足　 蓮華

モーハーン　 カシャム 　バフ　 クリターム　 ナ　 バジェー　 ヤトーハーム

Mohan-kasham bahu-kritam na bhaje yatoham

無知　　　　　取り除く　　　一杯　　 憧れをもって (否定形) 祈る　 ～ですから

タスマーッ　 トヮメーヴァ　 シャラナム　 ママ　 ディーナ　 バンドゥー

Tasmat tvam-eva sharanam mama dina-bandho!

そして　　　あなた　 ～だけ　 避難所　 私の　 貧しい人　 友達

＜意味＞

シュリー・ラーマクリシュナ、あなたは根本エネルギーであり、普遍の存在、最高の真理です。あなたは全てのグナの勝利者、グナをコントロールするお方。

あなたの蓮華の御足を礼拝すると、すべての無知・幻惑は消えてなくなります。

しかし私は、昼夜いつでも、あなたへの深い憧れの心を持って、その御足を礼拝してはいません。

あなたは罪人や弱い人、貧しい人、困っている人たちを助けてくださる。

あなただけが私の唯一の避難所。決して私を見捨てる事がない、貧しき私の友達！

＜賛歌集の訳＞

あなたは神秘な響き、オームとフリムによって示された至高の存在。

あなたは不変の真理、あなたはグナの支配を超越し、しかも、あなたの栄光はグナを定める。

私は、迷妄を破壊するあなたの御足を、憧れの心と確固とした決意をもって、日夜礼拝することを忘れている。

あなたは私の唯一の避難所、おお、卑しい、迷える者の友よ！

＜語句解説＞

Om：ブラフマンの音のシンボル。神様のシンボル。ブラフマンは絶対の真理、魂、永遠

Hrim：シャクティ（根本エネルギー）。母なる神様。マハーマーヤ

ritam：※1.永遠、普遍の「真理」「正しさ」

tvam：あなた

achalo：※2. achaloは動かない。

guna：サットワ、ラジャス、タマス、の３つの意味。

jit：勝利。

gunajit：※3. 全て。この場合「全てのグナをコントロールしている」という意味。

gunedyah：gunaグナ＋dyah尊敬する＝「そのグナたちは、シュリー・ラーマクリシュナを尊敬ししています」の意味。

Naktam：夜

divam：昼

Naktam-divam：夜も昼もいつでも

sakarunam：尊敬する者（礼拝する者、神聖な者）

tava：あなたの

pada padmam：※4. pada足＋padmam蓮華

Mohan：無知、幻惑delusion

kasham：取り除く、消えてなくなる

bahu：たくさん・何度も

kritam：憧れ。bahu- kritam＝何回も色々な方法で、いつも憧れを持って

na：打消しのna

bhaje：※5. 祈る、礼拝する、愛する

yatoham：yatahなぜなら＋aham私は、私は～ですから

Tasmat：そして、ですから

tvam： あなた

eva：だけ

haranam：避難所

mama：わたしの

dina：※6. 低いレベルの人、貧しい人、無知な人、罪人、堕落した人、弱く力のない人

bandho：友達

**＜解説＞**

ラーマクリシュナ・ミッションの本部とすべての支部では、夕方の祈りの時間に３つの賛歌を歌います。

「Khandana bhava」「Om Hrim ritam」「Sarva mangaala mangalye」です。

「Khandana bhava」はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダがベンガル語で作りましたが

「Om Hrim ritam」は、同じくスワーミー・ヴィヴェーカーナンダがサンスクリット語で作りました。ともにシュリー・ラーマクリシュナへの賛歌です。

ですからこの歌に出てくるbandhuhは、シュリー・ラーマクリシュナの意味です。

またこの曲「Om Hrim ritam」で面白いのは、シュリー・ラーマクリシュナの賛歌なのですが、ラーマクリシュナの名前が全然出てこないことです。しかし、内容は全てシュリー・ラーマクリシュナについてです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがこの賛歌を作った当時は、最後の部分、

「Om sthapakaya cha dharmasya Sarva-dharma-svarupine;

Avatara-varishthaya Ramakrishnaya te namah.

Om namah Sri Bhagavate　Ramakrishnaya namo namah」はありませんでした。

かなり後になって、ある信者の祭壇のオープニングの時に、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは突然その部分を思いついたのです。

後にラーマクリシュナ・ミッションでは、いつもこの部分を最後に追加して歌うようになりました。

※1. ritam：永遠、普遍の「真理」「正しさ」の意味。

同類語にSatyaがあるが、これは一般的な「正しさ」と永遠普遍の「正しさ」の２通りの意味がある。Ritamは普遍の正しさのみ。

※2. achalo：動かない。その意味は、物質ではないということ。

achaloはブラフマンの性質の一つ。物質ではないので変化しない、衰えない、始まりも終わりもない。

反対語はchalo：動いているchalo：（変化する）はプラクリティの性質の一つ。物質なので始まり、衰え、変化する。

シュリー・ラーマクリシュナはブラフマンと同じなのでこの曲ではachaloと表現している。

※3. gunajit：「全てのグナをコントロールしている」の意味。

我々は、いつもグナに負けていますから、gunajitではありません。サットワ、ラジャス、タマスの３つのグナが、私たちをコントロールしているのです。シュリー・ラーマクリシュナはその反対で、グナをコントロールしています。グナの持ち主です。

また３つグナを合わせたものがプラクリティです。

※4. pada padmam：pada足＋padmam蓮華

「蓮華の御足」とは？

本当の信者はいつも神様のことを考えています。

そして神様の「蓮華の御足」をとても尊敬しています。

この場合の「足」の意味は、肉体的な「足」ではありません。

礼拝の対象で「蓮華のように美しいとても神聖なもの」という意味です。

「足」は人格の、またその方の存在のシンボルです。

しかし、顔や手をシンボルにすることも出来ますが、どうして「足」なのでしょう？

インドやベンガル地方の歌では、足が神聖な方のシンボルになっています。

もし西洋ならおそらく手がシンボルになるのでしょう。挨拶の時握手をしますから。

このように、西洋や日本では「足」は特別な部分ではありません。

しかしインドの文化では、プラナーム（足にタッチしてご挨拶するやり方）の時にいつも足を触ります。

例えば日本語で神様の歌を作るとしたら、足をイメージしたりしません。西洋でもイエスの足に触れてご挨拶をすることがありますが、「その足は蓮華のようだ」という表現はキャロル（聖歌）には出てきません。

またインド人は、聖者以外にもお母さん、お父さん、尊敬する人の足に触れてご挨拶します。**「足」そのものが「尊敬するその方」なのです。**

**私たちは、いつも尊敬する人（神の化身）の蓮華の御足（pada-padmam）を思い出すと、すべての幻惑（Mohan-kasham）が消えてなくなるのです。**

※5. na bhaje

na否定＋bhaje（動詞）：祈る、礼拝する、愛する

＝na bhaje：神様を祈っていない、礼拝していない、瞑想していない、愛していない、実践していない

BhajeからBhajan（歌う、賛歌）が派生。

※6. dina bandhoについて

dinaは、低いレベルの人のイメージです。その人たちの友達は神様です。

bandhuh（名詞）はサンスクリット語で「友達」。

この曲の場合は、シュリー・ラーマクリシュナを意味します。

インドでは呼びかける際、単語の語尾が変化し、文法上bandhoになります。

例えば、ガンジス河gangaは河の女神で、呼びかける時はmother gangeに変化します。

このように、信者が神様に「おお神様！」とか「主よ！」という時は、自分の目の前にその方がいて、呼びかけるように祈っているので語尾が変わります。日本語でも、目の前にいる時は相手を「あなた」と表現しますが、その場にいなければ「彼」というように、その場のニュアンスの違いで、サンスクリット語も語尾が変化します。

|  |  |
| --- | --- |
| 基本形 | 呼びかけの文法変化 |
| Bandho（友達） | Bandhuh |
| Ganga（ガンガー女神） | Gange |
| Duruga（ドゥルガー女神） | Duruge |

神様にbandho＝（友達）と言うのは、神様に対して親しみを込めて自分の友達のように

語りかけるということで、インドではごく普通のことです。

**◆なぜ神様はdina bandho（貧しき者の友達）なのでしょう？**

お金持ちや有名人には、友人がたくさんいます。皆があなたの友達になりたがります。

しかし逆に、貧しい人、堕落した人、無知な人の友達にはなりたくありません。

お金がある時は皆があなたの友達になったとしても、お金がなくなると離れていきます。

また、息子や娘が悪人になると、親さえもその子供から離れたくなります。

しかし**どんな時でも神様だけは友達です。**

**何度堕落しても、神様だけはあなたを批判せず、決して離れません。神様は永遠の友達です。**

「永遠」というのは、時間だけではなく、状態も表しています。

「ずっと」と、「どんな状態に陥っても」という意味です。

神様が私たちを創ったので、神様は一秒たりとも、私たちから離れることはありません。

そして、私たちの中にはいつも神様がいます。

**◆それでは「人間の愛」と「神様の愛」の違いは何でしょうか？**

そのことが、「ラーマクリシュナの福音」の中に書いてあります。

我々の考えが１００とします。ある人が９９回ある人のお世話をし、１回だけその人の嫌がることをすると、その人は自分にしてくれた９９回の良いこと（お世話）を忘れ、１回の嫌なことをずっと覚えています。

しかし神様はその反対です。私たちが９９回神様の嫌いなことをしても、１回だけ神様の好きなこと（お世話）をすると神様は喜びます。人間の愛と神様の愛はその位違います。

私たちは「相手を許す」ということをあまりしません。しかし、**神様はいつも私たちを許しています。**「神様、どうか許してください」と言わなくても神様は許してくれますから、私たちはこうして生きていられるのです。

**内省すると自分がどれだけたくさんの過ちを犯しているかわかります。**

**しかし神様は全てを許してくださり「大丈夫です。もう一度挑戦してください」**

**―とあなたを助けてくれるのです。**

◆**シュリー・ラーマクリシュナはdina bandhoかどうか？**

シュリー・ラーマクリシュナの弟子、ギリッシュ・チャンドラ・ゴーシュは、大変才能のある素晴らしい人でした。詩人で劇作家、また俳優でもあり、素晴らしい劇や歌をたくさん創りました。その後たくさん勉強をして学者になりました。

シュリー・ラーマクリシュナの弟子たちの中で、一番頭がいいのはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、次がギリッシュでした。しかし彼はお酒が大好きで、酔っぱらって何度も悪いことをしました。

例えば、劇場で芝居を演じている時、酔っぱらってフラフラしたことがありました。それを観ていた観客は「酔っ払い！」と彼を野次りましたが、ギリッシュはこう言い返しました。

「あなたもお酒を飲むと酔っ払う。しかし飲まない時は普通の人でしょう。私はお酒を飲むと酔っ払いになるけれど、飲まない時はギリッシュ、偉大な人間です！」

それほど彼は自分に自信を持っていました。

ところがギリッシュは、その後シュリー・ラーマクリシュナの弟子になり、シュリー・ラーマクリシュナは彼の過ちをすべて許しました。そしてギリッシュにこう言いました。「あなたは段々と清らかになりました」と。シュリー・ラーマクリシュナは、彼の罪を引き受けることで、癌になりました。ギリッシュには才能がありましたが、その性格の良くない面を、多くのコルカタ市民は批判していました。しかしシュリー・ラーマクリシュナは、ギリッシュの悪い性格は何も気にせず、彼の避難所になったのです。これが１つの例です。

もう１つの例を挙げましょう。

当時、女優というのは演技の才能がある娼婦がしていて、家住者の女性は女優にはなりませんでした。神聖なテーマの劇でも、娼婦が演じていたのです。

シュリー・ラーマクリシュナは、時々劇場に行って神聖な劇を観に行きましたが、娼婦が演じているということを気にしませんでした。

またシュリー・ラーマクリシュナは、罪人が足に触れるととても痛がっていましたが、観劇の後に女優たちが足に触れ、プラナームをしても拒否しませんでした。

その娼婦の中に、ビノディーニという名の素晴らしい才能を持つ女優がいました。

彼女はいつも、神様や女神の役を演じていました。ある時、彼女がシュリー・ラーマクリシュナに挨拶に来た時、彼は拒否するどころか彼女を慰め、「今から神様の名前を唱えなさい」と言いました。

それから彼女は、神の御名を唱えることで次第に素晴らしい信者になりました。

**「ラーマクリシュナの生涯」の中には、シュリー・ラーマクリシュナのもとに、悪人、罪人、貧しい人が挨拶に来ても、決して拒否することなく、彼らの避難所になったことが書かれています。**

かつてベルル・マトの僧院が出来る前、別な場所でシュリー・ラーマクリシュナの生誕祭を行っていました。

その生誕祭の時、娼婦たちが来ているのを見た紳士たちは、自分たちの社会的なステータスが汚れるからと、彼女らを批判しました。

彼らは、「彼女たちが来るなら来年からもうここには来ません」と言ったので、シュリー・ラーマクリシュナの直弟子の一人が、西洋にいるスワーミー・ヴィヴェーカーナンダに手紙でそのことを伝えました。

しかしスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの返事は、「**シュリー・ラーマクリシュナは、貧しい人、罪人のためにこの世に現れたのです。**だから、来年そのような理由で紳士たちが来なくなっても構いません」という内容でした。

このように「mama dina bandho」 は作者のスワーミー・ヴィヴェーカーナンダが想像で書いたのではなく、シュリー・ラーマクリシュナは、本当にdina bandhoだったのです。